

品種と技術、その後 . .

暖地向けのソバ品種「春のいぶき」と「さちいずみ」

【暖地のソバ栽培】

暖地におけるソバの栽培は5年ほど前までは「鹿屋在来」^{かのや}を利用した秋まき栽培だけが行われていました。「鹿屋在来」は晩生で播種から収穫までにかかる日数が長いと、台風被害や早霜の被害を受けやすく、年次間で生産量が大きく変動しました。

そこで、ソバの安定生産や高付加価値を生み出すことを期待して開発したのが、春まき栽培用品種「春のいぶき」(写真1)と秋まき栽培用品種「さちいずみ」(写真2)で、2010年に品種登録されました。

【温暖な気象条件を活かした「春のいぶき」】

「春のいぶき」は蕎麦消費のピークとなる夏に新蕎麦を提供できる初めてのソバ品種なので、非常にインパクトがありました。そのため品種が公表されると同時に大分県豊後高田市や鹿児島県などで栽培が始まりました。現在も栽培地域は拡大しており、熊本県合志市を含む九州各県あるいは島根県や兵庫県、滋賀県でも栽培されています。現在の栽培面積は200ha程度と推定しています。

「春のいぶき」の普及に伴い新しい作型と産地ができましたので、現在、さらに早生で穂発芽しにくい春まき栽培用品種の開発を行っています。現地試験を実施中の有望系統が新品種になれば、さらに広い地域に春まき栽培が普及するものと考えています。

【多収の秋まき栽培用「さちいずみ」】

「さちいずみ」は暖地の秋まき栽培向けに開発した多収品種で、栽培期間が短いので早い時期に来襲した台風や天候不順で播種期が遅れてしまっても栽培できます。これまでと同じ秋まき栽培用品種のためか「春のいぶき」ほどインパクトはありませんでしたが、着実に普及しています。現在の栽培面積は150ha程度と推定しています。「さちいずみ」は沖縄地域でも栽培適性があることがわかり、現在、普及が進んでいます。しかし、九州地域の秋ソバ栽培では依然「鹿屋在来」が多く栽培されています。そこで、「さちいずみ」のメリットなどがよくわかり、栽培にも役立つようなマニュアルなどを作成して普及を進めていきたいと考えています。

「春のいぶき」と同じように「さちいずみ」でも後継となる品種開発に取り組んでいます。「さちいずみ」には穂発芽耐性を付加しておりませんでしたので、現在、穂発芽しにくく、熟期も早く、収量性が「さちいずみ」並かそれ以上の新品種の開発を行っているところです。

【作物開発・利用研究領域 松井 勝弘】



写真1 開花期の「春のいぶき」
(合志本所の試験圃場)



写真2 開花期の「さちいずみ」
(鹿児島県内の生産者圃場)